

令和3年度 西武学園文理中学・高等学校 経営報告

校長 柴田 誠

I 校長経営方針

- 1 本校の重要な使命は、生徒のグローバルな人間性を育むとともに、生徒の資質・能力を伸長させ、希望する進路実現を図ること。
その使命を、実現するために、全教職員が前例にとらわれず、日々創意工夫を重ねながら、最適の教育活動を生徒へ提供する。
- 2 面倒見のいい指導体制を整え、生徒・保護者への適切な情報提供や指導の充実を図る。また、安心して安全な教育環境を提供し、生徒・保護者の学校に対する更なる信頼感及び帰属意識の向上を図る。
- 3 小中高一貫教育の連携及び再構築
小中高の教育活動の接続を新たに見直し、学園の新しく魅力的な教育活動の流れを整える。その為に連絡会を設置し、情報の共有と各校の戦略を構築する。

————— 上記経営方針の下、以下の重点目標を掲げ経営を行った結果を報告する。 —————

II 高校の重点目標

- 1 4 1期生のクラス編成及び習熟度別授業の定着と充実
 - ・早期の文理系分けを止め、混成クラスを実施した。心配された混乱は全くなく、生徒間の人間関係も例年の幼稚な言葉遣いや行動が押さえられ、総じて落ち着いた雰囲気醸成できた。
 - ・新たなGCPの導入で生徒たちの学習に対する刺激にはなっている。今後もプログラムの改修を続けたい。ホールディングスの授業の達成度が不十分。教員の指導力の向上が鍵。
 - ・数学の習熟度別授業展開は、内進生の上位層の増加と階層の減少傾向が成果
 - ・英語の習熟度別受領展開は、高入生のグローバルクラス生徒の成績向上が顕著。
- 2 進学指導体制の整備
 - ・外部模試等の実施修正は完了し、生徒への実施後の指導も実施できている。
 - ・面接指導週間の設定し、保護者・生徒との三者面談の実施できている。
 - ・夏期ゼミ等への参加者は倍増できたが、冬季・春季と続く体制が不十分。今後は個別指導の充実と確実な実施を把握する必要がある。
 - ・新たな大学入学共通テスト及び大学別入試問題への、教員の準備がまだ不十分。その為に生徒への指導が後手に回る状況が露呈した。
- 3 教科指導力の向上
 - ・教科による指導力向上対策（Faculty Development）を実施するが、教科により温度の差がまだある。定期的な研究授業は80%以上実施できた。成果を通常の授業に還元するまでには至っていない。
 - ・高1に探究活動は狭山地域と連携し、発表まで至ることができた。新たな学力に対する教員の意識の向上はまだ、不十分である。
 - ・管理職による授業観察は年2回実施できた。
 - ・生徒による授業評価を外部委託せず校内で作成実施し、支出節約（150万円）につなげた。
 - ・外部教科研修会への参加はオンラインが急増したが、教員も大いに参加していた。
- 4 生活指導・教科外活動・広報活動の充実
 - ・生徒の問題行動は、コロナ禍での登下校のため、例年よりも少なかった。
 - ・退職者が増える中、部活動を保障するため、適切な顧問配置を図った。
 - ・生徒への体罰・いじめアンケートは無事実施し、重篤な案件はなく指導対応済み。
 - ・予定どおりの広報活動を実施完了。受験生数はコロナ前に回復。

5 入試広報活動の充実

- ・生徒の学力が伸長している証拠をもって、広報にあたる。（証拠が表明できなければ、学校は衰退する。教職員の存在価値はない。学力推移、外部模試、GTEC、英検などの成果集計。）
- ・高校入試英語の自作のリスニングテストは、県立・都立高校同様に、無事実施できた。
- ・学校見学者数は、以前の数に回復できた。しかしながら、手続き者数は以前とは異なり低い。塾、予備校の先生方には、オンラインの説明会を中心に対応できた。

Ⅲ 中学校 重点目標

1 組織運営の明確化・効率化・情報公開

企画運営会議・職員会議の時間短縮は十分図れた。管理職会議の内容も職員に公開できた。

2 進路指導体制の強化

進路指導部主任が、模試ごとに成績分析と教員への指示を出すところまで完成した。進路指導部として、生徒に対する目標値を設定できたが、学年や担任を動かす状況までは至っていない。

3 教科指導力の向上

管理職による授業観察を実施できた。研究授業の実施が、授業内容・方法の改善になかなか結び付かない点が課題である。

- ・英語教育における成果は GTEC や英検を全員必修の受験とし、英語科に到達目標を設定させ、学年経過を計測・分析させる事ができた。
- ・中学卒業時、英検準 2 級以上取得（72%→67%）、漢検 3 級取得（91%）

4 英語教育の指導強化

- ・小学校からの接続を考慮し、英語力上位者には、適切なグルーピングによるハイレベルな英語教育をさらに提供しているが、まだその成果を検証できていない。
- ・GCP の導入により、新たなグローバルスキルを身に着けるきっかけになっている。更なる授業内容の充実を図る必要がある。

5 中高一貫教育の在り方を再検証

- ・中学校の教育活動において、将来の若者が必要とする力を育成する新たなプログラムを実行。
 - ① 授業改善や新たなプログラム導入。グローバルを謳う本校だからこそ、海外研修だけでなく通常授業の中にグローバル要素を取り入れる予定が、他の PT 等に労力を取られ実施できず。
 - ② 先取り学習を再検証し、生徒の学習内容の定着をきちんと実証しながら、7 時間目授業の廃止し、各教科の定着を図った。成果は今後検証する。
 - ③ 従来の教育活動を検証することにより、教育内容の定着や成果確認、さらに充実を図る。（卒業論文の在り方、CAの在り方など）現時点で実施できず。
 - ④ グローバル精神を育成させるためにも、海外諸国の学習と平行し日本文化の学習にも力点を置く予定であったが、検討すら始められなかった。

6 生活指導・教科外活動・広報活動の充実

- ・生徒の自律心や社会性の育成、友好的な人間関係を構築する意思を育成する、現場の指導が十分に徹底できなかった。
- ・生徒への体罰・いじめアンケートの実施と、教職員への研修会は実施できたが、対応に時間がかかり、保護者生徒への報告・還元ができなかった。
- ・本来の全職員の広報活動に加え、狭山・川越の公立中学校長（43 校）への校長の効率的な訪問実施し学園の不祥事の謝罪が、やっと思えた。広報予算の適性配分を図り、担当職員の努力の成果として、2 年で 1,000 万円の節約を図った。
- ・他校の新設（開智所沢小学校及び開智所沢中等教育学校令和 6 年 4 月開校）を迎え撃つ、進学実績確保と広報戦略の策定を予定したが、サバイバル PT での検討・協議が進んでいない。